

アーティストインタビュー

飯沼由和さん

—では、飯沼さんの年表をちょっと知りたいなと思っていて、幼少期の頃から、今に至るまでをちょっと細かくお話できたらなと思います。飯沼さんの幼少期はどんな子どもだったのかとか、どんな環境で育ったのかっていうのをお聞かせください。

—はい。仙台市出身で1980年12月2日に生まれて、両親と、あと4人兄弟の3番目です。あと、おじいちゃんおばあちゃんも一緒に住んでたんで、8人家族で生活をしてました。で、そうだね、幼少期。今なんか覚えてるのが、ご飯、夜ご飯が終わったあとに、縄跳びをマイク代わりにして、家族の前で歌ってたっていう写真があって。だからそういう、歌を歌うとか、そういうことが好きな子どもだったんじゃないのかなと思います。あんまり関係はないけど、4歳の時に父親の仕事でアメリカに行って、1年半アメリカに住んで、で、帰ってきて幼稚園に入りました。で、小学校の時からずっと野球をやっていて、高校までずっと野球をやっていました。あと子どもの頃に、うちの母親が、音楽が好きな人なんですけど、仙台の子ども劇場っていうのがあって。親が子どもを連れて見に行く劇のものがあったんですけど。それによく母親に連れられて観に行っていたっていうのが、なんか演劇とか、そういうミュージカルとかを初めて触れたきっかけかなあとと思います。今もある仙台市民会館の小ホールとか、ああいうところで観ていた記憶があります。

で、そうだな。野球をずっとやっていたので、あまり演劇とかに触れる機会っていうのは、その子ども劇場以来はなかったんですけど。なんかでも、人を笑わせたりするのはすごい好きで。なんかそういうことが面白いな、みんなが笑ってくれんのいいなみたいなものはずっとあった気がします。ただ、高校時代の野球部とかでは結構なんか浮いてる存在でもあったし（笑）。なんて言うのかな、野球はうまくないけど、出てくるとみんなが囃し立てるみたいな、そういう感じのポジションでいましたね。

高校まで野球ずっとやって。ただ、昔観ていた子ども劇場とか面白いなっていうふうに思ってたし、高校ぐらいになるとやっぱ映画とかドラマを観出すようになって、なんかそういうこと、面白そうだなっていうふうには、やってみたい

なっているように思ってきました。で、高校卒業して、大学1回落ちて。で、代ゼミに通って。代ゼミに通ってる時も、結構なんか、映画とかドラマとか、本読んだりとかっていうことを結構して。あとやっぱり、演劇とかなんかそういう、演技のなんかやってみたいなと思ってたんで、東京行きたいなとは思っていたので。大学、東京のほうの受けて。で、日本大学の文理学部っていう、なんていうか、芸術学部ではない普通の、文系理系ごちゃませの学部に入りました。で、演劇とかそういうものをやってみたいなというふうに思っていたので、大学入ってすぐに学内の演劇サークルを観に行き、入ったんですね。温水 Y っていう演劇サークルだったんですけど。温水洋一さんを好きだったっていう人が作ったらしくて。温水 Y っていうところに入りました。それ入ったのはたぶん、4月とか5月とかに入って。6月の新歓公演の時に僕含め先に入っていたメンバーがもう出ててそれに。新歓公演に僕たち出て、やったっていうのが初舞台でした。

その演劇サークルが、入った時の、上級生、先輩が、なんかとてもいい出会ったなって今にして思うんだけど。演劇のこと、そういう演技とかやりたいなというふうには思ってたんですけど、別に何も知らなくて。野田さんも知らないし、つかこうへいも知らないし、もう何も知らなかったんですけど。入った先輩が、つかこうへいの作品がすごい好きで。つかこうへいの台本を、なんか自分風にアレンジして書いて、みんなでやるみたいなことやって。そこで、そういうつか風芝居をやるのが、スタートとしてすごい良かったなって今は思うんですね。つか芝居って、ものすごい熱量で、ものすごいスピード早くばーってやる。で、相手にもうがーってこう、すごい熱量ですけど。なんかそういうことを最初にやったのがすごい良かったなって思ってた。

で、大学時代はその演劇サークルに1年目から入って。で、その先輩が小劇場とかいろいろつながってる人だったから、その人たちの芝居観に行ったりとか。で、1年生の時からもう小劇場、外部の人たちと一緒に出させてもらったりとかってするようになって。なんで大学の時は、もう演劇サークルもやったし、外部の、下北とか新宿とか、なんかそういうところでだんだん観ていくっていうことをやってました。

で、最初にやっぱそのつかさんの芝居、つかさんの演技みたいなところから入って、そこから日常劇みたいな方向の芝居にも出るようになっていって、なんかそこで、今の自分の基礎ができたんじゃないのかなっていうふうに思います。

大学までだとそういう感じですかね？

—ありがとうございます。幼少期の頃から、歌ったりとか、そういう人の前に出るのが好きだったんですか？

飯沼：家族の前でやるのが好きだったんじゃないですかね。でもなんか、そうだな。中学校の時の文化祭で、どういう経緯か分かんないけど、僕がなんかボーカルで出るみたいな時もあったし。それも別に、好き好んでやったっていう、やりたいっていう感じではなかったんだけど、なんかやったりとかはしてたかね。

—大学時代、たくさん外部出演もされたってことだったんですけども、それは外部のほうからお声がけいただいてっていう感じなのか、飯沼さんのほうから出させてくださいっていう感じで出ていったんですか？

飯沼：それはもうどっちもあって。でも、あの頃、今もそうだと思うんだけど、もう本当に、仕込み手伝って芝居観せてもらって、打ち上げ出てみんなで話してとかっていうことがすごくつながるきっかけになる、なったから、いろんなところ芝居、仕込みに行ったし、ばらし手伝ったりとか、そういうところで声かけてもらったりとか、僕が出た芝居を観てくれて、一緒にやろうっていうふうに言ってくれた方もいたし、うん。どっちもありました。

大河原：東京で、散歩道楽に入って2年、辞めるかっていう時、何月でした？ 帰るって決めたの。

飯沼：何月だろう？ 7月ぐらいかな。本当はもう出る予定のある芝居もあったんだけど、もうだめで。逃げるように帰ってきたんですね、その時ね。だから、正直、僕、太田さんと、太田さんというか散歩道楽に非常に不義理な辞め方をしたので。それからもう、散歩道楽が解散公演するまで、1回も僕行ってないし、連絡も取らなかったし。でも、2015年に散歩道楽が解散するっていうのを聞いて、もうここで謝らないと、もうたぶん一生会えないなと思ったから観に行つて。で、打ち上げ参加して、ばらしも参加して。打ち上げの席で太田さんとかいろんな人に謝って。でもそれがあったから、今、太田さんともまた仕事ができる

ようにもなってるんだけど。本当にね、ひどい辞め方をしました。

大河原：ひどい辞め方をしたけど、2010年从此、クレジットでいろんなSNSやらに飯沼由和の4文字が並ぶわけじゃないですか。どんな気持ちでした？

飯沼：だから2007年ぐらいに帰ってきて。でも、親にも申し訳ない気持ちがあったし。だから、もう働くつつって仙台の会社に入って。正社員で働くようになって。だから3年、4年ぐらい、2011年2010年か、までは全然活動してなくて。だからって言うわけでもないけど、それが、やっちゃいけないみたいなのがあったのかもしれないですね。僕、コールセンターの社員やってたんですけど。で、コールセンターでバイトの人が、やっぱりオペレーターの人って役者とかミュージシャンとか多くて。で、その時、一緒に働いてた中で、役者の子が何人かいて、で、その子の芝居観に行ったりとかはしてたんですよ。自分は別にやんなくていいかなとも思ってたけど。で、観に行った時に、2010年の芝居観に行つて。それ、SENDAI座の新人の子たちがやる芝居だったんですけど、確か。それ観に行った時に、チラシに、「若伊達プロジェクトが2011年3月に芝居します」っていうチラシがあって、オーディションやりますって書いてあったんですよ。で、なんかそんな時に、あ、なんか、会社員何年かやってきて、生活もできるようになってたので、もう趣味として、芝居にもう1回関わっていてもいいかなって言うふうに思えるようになってきて。で、その若伊達のオーディションを受けたんですね。

で、その時に、澤野と小濱と山澤さんと、あと村岡さん。この4人がやっているとこで、そのオーディションで初めて10-BOXに行ったのね。で、その時に、澤野とかとオーディションで会つて、なんか澤野もすごい、「すごいいっすよ！」ってすごいなんか気に入ってくれて。で、一応オーディション合格して。その時に会つたのが、まだ学生時代だった本田とかツンちゃんとか。あとミサイルの佐川さんとか、そうそう佐川さんとかに出会つてますね。で、会社員にやりながら稽古出つて。で、2011年の3月二十何日が公演日だったから稽古して。なんか、だから、会社員やってるから稽古出れない日もあったし。でもみんなそれ許してくれて、できる範囲でやっつけてくださいって、たしか言ってくれてたから、なんか趣味としてやっついこうというふうに思つて稽古してたんですね。

したら、2011年3月11日の震災があつて、全部それが流れて、公演自体が

できなくなって。で、僕も会社員だったから、震災の後片付けとか、会社の立て直すほうも忙しくなるし。でも、そん中で澤野とかがまだいろいろつながってはいて。澤野が今度シアラボ、仙台シアターラボで公演があるので、ヌマさん、一緒に入りませんか？ って言ってくれて。2011年の5月の『腐敗』っていう、野々下さん、原西さん、なまさん、鰯さんとかが出た芝居観に行って、今まで観たことない感じの芝居だったんだけど、でも面白いなと思って。で、澤野も誘ってくれたし、本田とか、大地とかも出てたんだけど、たしか、出るっていう話で。で、2011年の10月か11月ぐらいになんか、シアターラボの公演に出て。それが仙台でやった初めての芝居でしたね。

一言言さんで、2023年、これから、目標だったりとか、そういうコンセプト。今、先ほどコンセプトも教えていただいたんですけども、何か目的を持ってこれやろうかなとか、新しく思ってることだったり、これは継続したいと思ってることだったり、あればおしえていただきたいです。

飯沼：コンセプト自体は、変わらず。僕が面白いと思って、みんなに観てもらいたい芝居を作り続けるっていうことは変わらずで。で、そうだね。仙台プラス、最近ほかの県、東北のほかの県の方たちと関わることも増えてきたから、ぜひ東北を、言言で回ったりしていきたいなっていうふうに思っています。あと今、映像で人形劇みたいな、ジオラマ演劇って僕は呼んでるんだけど、演劇の台本を使って人形劇をするっていうものやってるんですけど、なんかそれも継続して作っていきたいなと思っていますね。あとは大きい公演じゃなくて小さい、本当に短編みたいなお芝居を、仙台の劇場じゃなくて、そういうカフェとかでやりたいというふうにも思っているし。あと、やりたいのは、言言のもう1つの目標として、仙台でいろんな劇団の人で、いろんな役者さんがいる中で、あんまり一緒にやったことがない人がいると思うんだけど、なんか言言っていうもので、そういう人たちが一緒に作品を作ってなんかもっと広く、いろんな人が一緒にいられる場になったらいいなと思っていて。だから、年上の人もそうだし、あともちろん年下の若い人たちとも一緒に芝居を作っていききたいと思うし、なんかそういう出会いの場、つなぐ場っていうものもやっていきたいなと思って思います。